

山行番 NO. 1675
日時 2016.02.18 (木) 無風快晴
山域 八ヶ岳・硫黄岳 (2760m)
コース・ 下土狩発5:00—小淵沢 IC—美濃戸発7:42—赤岳山荘発8:37—赤岳鉱泉10:40
タイム —赤岩の頭12:30—硫黄岳12:56—赤岳鉱泉13:59—赤岳山荘15:32—長泉19:30
標高差 上り=美濃戸約1480m~硫黄岳2760m=約1280m
下り=硫黄岳2760m~赤岳山荘約1680m=約1080m
参加者 後藤、勝又陽、浜道=3名

本日の山行は、元々は20日、21日で八ヶ岳の本沢温泉から、天狗岳に登る予定が週末悪天候予想の為、急遽、決まった山行だ。

早朝5時、長泉町を出発、Hさんを迎えに行き新東名、富士宮経由で中央道小淵を経て美濃戸口着、7時28分、天気は無風快晴、風が無いせいか思っていたほど寒くはない。支度を済ませ7時42分登山開始。予想していたのとは全く違い雪がまったく無い。

赤岳山荘に向かっている途中、道路に雪がほとんどないためリーダーのGがこれなら車で赤岳山荘の駐車場まで行ける、上まで行ければ帰りが楽になるということで車をとりに戻ることになった。私とHは赤岳山荘に向かい8時32分赤岳山荘着。ここでトイレを使い目についた温度計を見るとマイナス8℃を示していた。

待つこともなく車が到着、駐車料金を払わず赤岳鉱泉を目指す。北沢と南沢の分岐から北沢のルートへ、道は雪が凍っていて歩きにくい特に雪が融けて水たまりになった

箇所は完全に氷状態でツルツルだ。しばらくそのまま進んだが安全を考慮してアイゼンを装着。途中、木陰に何か動く大きな物体が、なんと日本カモシカが3~4m先にいる、逃げる様子どころか警戒心まったく無い人に慣れてしまっているのか驚きだ。沢沿いに登って行くルートは緩やかで上り易いが暑くてたまらない。頭上ではヘリがひっきりなしに荷物を提げて運んでいる。

10時40分赤岳鉱泉着。ここにはアイスクライミングのトレーニング用に氷壁が作られているこの氷壁は「アイスクャンディー」と呼ばれているそうだ。氷壁を眺めていると先ほどのヘリが飛んできて荷物を降ろしている。リーダーが小屋の若者に聞いたところ1ヵ月分のビールを運んでいるとのことだった。

鉱泉から硫黄への登り口が分かりにくかったが、小屋のすぐ裏からシラビソの樹林のなかを上りだす。上りはじめはさほど急でもなく淡々と進んでいたが、ジョウゴ沢を渡るといきなり急登になる。雪は凍っていないため滑ることはないが視界が悪い。ジグザグの道を上り続けるのはうんざりしてくる。とにかく暑い。12時頃視界が開けた場所に出る。ひと休憩。目の前に山並みが広がっているホットする瞬間だ。再び上り始めるが相変わらず視界が悪い、やっと視界が開けたのは雪に埋もれたハイマツが現れた赤岩の頭直下あたりからだ。

樹林帯を抜けるとさすがに風が強い。身支度をし直す。赤岩の頭の分岐、12時30分分岐着。先行していた若者二人は軽アイゼンのため硫黄までは行かないという。我々は硫黄岳を目指す、ここからは岩場もあり凍結している場所もあり、そして風もあり十分注意して上らなければならない。



カモシカさん

横岳大同心



赤岳鉱泉アイスクャンデー



荷揚げされたビア



突然開けた場所に出る。

12時56分硫黄岳頂上に到着。いつもの様にメンバーで握手を交わす。見渡せば360度、大パノラマ。目のまえには横岳、赤岳、阿弥陀、後ろには北八ヶ岳の景色が広がっている。素晴らしいの一言だ！！

山頂には二人の若者がすでにいたが彼らは夜明けとともに行動開始したとのことだった。記念写真の後、爆裂火口を恐る恐る覗き、帰路に就く

13時59分イッキに赤岳鉱泉まで下り昼食タイムをとりました。登るときには数人しかいなかった登山者が、これからどこへ向かうのか分かりませんが若者たちのグループなど多くの人がいることに驚きました。休憩後は駐車場まで又イッキに下り15時32分無事下山。帰路につきました。

今回は私の希望で念願の硫黄岳の登頂でき天候にも恵まれ大変満足のいく山行でした。

参加者一言

後藤 「この山の展望は天下一品。また、上り易い山なので、もっと多くの会員に上って貰いたい。」

浜道 「降雪量が少ない今年の八ヶ岳は何事もなかったように美しいですが、足元の雪はガチガチで、アイゼンを最後まで履かなければならないほど、気の抜けない道でした。」



素晴らしい景観



硫黄岳上り



南稜から来た
若い衆



硫黄岳頂上